

学歴 昭和十四年三月 青波尋常高等小学校卒業

昭和十四年四月 県立彦根商業学校入学

昭和十八年十二月 同校 卒業

職歴 昭和十九年一月 満州国鞍山市 株式会

社 昭和製鋼所入社

昭和十九年一月 茨城県友部訓練所入所

昭和十九年三月 二カ月の訓練終了渡満

昭和十九年四月 本社経理課財産班勤務

昭和十九年 昭和製鋼所、他二社と合併

満州製鉄株式会社 理事長 岸本綾夫

陸軍大將就任

父 庄大 関西電力の前身宇治川電気田町変電所

勤務 兼業農家

母 みな 農業

兄弟 四人（現在）

（滋賀県 林 憲一）

シベリア抑留記

島根県 谷口澄晴

入隊までの職歴

嘉久志小学校卒業

兵庫県出石国民学校本科四年卒業

同 右 研究科二年卒業

父は出石町にて瓦製造業に従事しており、跡を継ぐために出石町に行く

昭和十四（一九三九）年十二月一日徴兵検査、

十二月生まれは翌年まわし、司令官より甲種合格と言われ喜んで森脇村長に報告すると、村長は立つて司令官の所に行かれ、私は控室に入り、直ちに呼び出され検査。軍曹の所より軍医の所に行き、大丈夫と言われ、司令官の前に行き、第二補充兵に編入と申され残念でした。

私が小学校五年生のとき、体操の鉄棒で左手を折り、村長の息子さん、小学校の教頭先生が私を

抱いて医者に連れて行って下さったので良く知っておられました。

男二十九人中、甲種合格は田中三男君一人でした。その当時、軍隊に皆懂れており、行かない者は変に思われた時代でした。その後父に職を教え、兵庫県夜久野村中島瓦工場頭職として務めて、一工場を任されておりました。

昭和十五年七月中旬召集令状受け取る。

入 隊

昭和十五年八月一日歩兵二十一連隊第二大隊に入り、順番待つも外の者は連れて行かれるのに、私達若い者三人が残り一カ所に集まり、どうしようかと話していたとき、週番司令が来られましたので、私達三人何したら良いですかと問うと、若いので残っておったかと話され、下士官の方を呼んでそれとそれを連れて帰れと言われ、三人別れました。私は第八中隊中尾隊第一班豊田千代美軍曹の部下となりました。第一期検閲終了後
昭和十五年十二月三日宇品出港、支那に渡る

昭和十八年七月召集解除

昭和十八年十二月就職のため満州に渡る

鞍山市在住の従兄弟の本川俊雄君に就職を依頼していたところ、鞍山市の金井様と言う方が立山に煉瓦工場を持っており、支那人を二百人くらい使用しているから来てくれとのこと。鞍山駅に着くと本川君が来てくれていた。本川君は、江津市波津町出身で鞍山市にて建築、土木をしている安部倉様に挨拶したが良いと言われ、立ち寄り挨拶した。安部倉様は、本川君の親戚で「一度戦争に行ってきたのだから二度と召集はないだろうから柱になってやってくれ」と申された。金井様は安部倉様に話をして下され、私もお世話になりますと申し、非常に喜んで頂き、本川君の下にて初音街に四戸住まい十五棟建ての材料係として、支那人の馬車頭を使って運搬するため多少支那語が分かるので助かりました。

昭和二十年度は日吉街に四戸住まい二階建二十棟を建てることとなり、地ならし建築で私が現場

責任者で日本人は大工さん一人、本川さんと三人で一日支那人百五十人ぐらい使用するので大工、左官、クリーたちから眼が離せません。

私も鞍山市在郷軍人として出ますが人員は少なかつた。

二十年五月ごろより鞍山製鉄所を目標にB29が三機から多いときは五機飛来します。第一回は我が戦闘機二機が応戦しましたが一機は私達の見ている前で、残念ながら煙を吹いて落ちていきました、残念でした。次からは一機にて出撃応戦しているのを、二回ぐらい見ましたが、其の後出撃はありませんでした。

B29は西から製鉄所を目標に爆弾投下して来ますが、製鉄所には風流れて当りません。東は原野、社宅、私の現場付近に落下してきます。サイレンと共に女、子供は防空壕に避難します。男は皆務めにて、残りの方、二、三人と私でお世話致します。その後、調査に回ります。穴の直径縦八メートル、深さ六く七メートル、大きい穴が開き

ます。

一度私の現場と社屋の間に一発落ち、外を見て回って帰り、穴が開いており、びっくりして良く見ると穴のそばに畳の端がちょっと見えますから。皆さんに防空壕は穴を掘って畳を上置いても助かると話したことがありますので、スコップを事務所より取り、山のようにある土を少し取り除き、足をドンドンと踏みましたが返事なし。おかしいと思い、また土を少し取り除き、ドンドンと踏みますと始めて下から突き上げてる様な感じがしました。ご夫婦二人おられ、爆弾が落ちたときは上に突き上げられてドスンと落ちたと話され、怪我一つなく、手を握り合って喜び合いました。忘れられない事です。穴の端から二メートルの所でした。

シベリア抑留と闘病生活

二十年八月二日臨時召集により第一七三師団挺進大隊に応召、奉天（瀋陽）駅集合

八月三日鮮満国境通過

八月四日咸鏡北道羅南着 羅難フヨク第七二三
四部隊入隊、中隊長より呼び出され、実戦を経験
したのは君一人だからよろしく頼むと話される。

八月十一日羅南出發、南下定平着、定平より三
里奥地の山間部に入る。

八月十二日羅南、ソ連空軍に爆撃される。

八月十四日定平の町に出ても良いと中隊長命令
が出る。実はみんな食糧なく、食べずにいた。私
は、明日十五日定平の町に出る旨、中隊長から許
可を取る。定平の町に出るのは大隊で私の分隊一
個分隊だけの様子。朝、点呼取り、九時ごろ出發。
定平の町に着く。白米、塩さばを買い、小生一人
満州出身者。皆さんは内地の東北出身者で私より
も年配の方々、私は幸いに金を持っておりまし
たから、皆さんを腹いっぱいにして上げたく朝鮮人
宅をお願いして、大きな鍋にてご飯を炊いて頂い
ておりましたら、一人の兵隊が、「分隊長、ちょ
っと来てくれ」と言う。付いて行くと朝鮮人宅に
入り、朝鮮人の方が、私は日本で新聞記者をして

いたが、今、日本は降伏したから部隊に早く帰り
なさいといわれ、ありがとうと言ってご飯を炊い
ている家に帰り、早くご飯を食べようと、熱いの
を急いで食べ、残りはむすびに。塩さば及び米を
背負い急行軍にて帰途につく。途中先遣分隊と会
い、隊長の様子が分からぬから早く出てきてくれ
と言う。大隊長自刃、中隊長が心配して待つてお
られるとのこと。私も年配の方一人を連れて町を
歩き、話して教え回る。中隊長、山の出口で軍刀
を杖について立って小生分隊を待つておられた。
中隊長が大隊長自刃されたことを知っておるか
と申され、先遣隊より聞いておりますと申しますと、
中隊長命令にて中隊は出發するから場所を頼むと
申され、むすび及びサバは残りの分隊の方に渡し、
直ちに定平に出發する。到着して見ると皆んな戸
を締めて人一人見えない。

中隊来り、武装解除とのこと。何をするか考え
た末、武器の捨て場所なく井戸に入れることに決
定。軍刀、拳銃、三八銃は紋章消して投げ入れま

した。悪いとは思いましたが外に方法なし。夕方汽車に乗る。皆んな帰るんだと喜んで乗り、私は満州に妻、子供がいるし、仕方なしに行く所まで行こうと思いつつ、長く乗っておりました。

八月十九日平安南道平壤（ピョンヤン）着、飛行場外地に分隊ごと夜営。ここで将校、下士官、兵に別れると、中隊長より話があり、兵隊をよろしく頼む、万一のことがあつてはならぬからと申された。其の後、朝鮮、満州から召集された者解除あり。小生一人残る。私は鞍山富士小学校の先生に帰れぬからと伝言を頼みましたが、届いておりました。周辺の警備はどうなっているかと、裏の小山を越すと、ロスケ兵三十メートルごとにマシン銃を持って立っていたので、駄目と思いつ分に帰ると、私の枕元に拳銃、下駄が置いてあり、誰かが心配してくれたと思いつ分に拳銃を上衣の下に入れる。平壤通りは警備なし。下駄をはいて平壤の町に向かつて歩きました。

曹長が糧秣を受領して帰って来るのと会い、谷

口どこに行くかと申され、ちよつとと言うと小生の肩に手を当てて帰ろうと引つ張られて止むを得ず帰り、もう駄目と思いつ分に残る気分になり、拳銃は畑の中に埋めました。

夕方、年配の兵隊が小生のことを考えてくれたか、班長行きましよう、テントから出てみると誰もおりません。近くに被服倉庫がありました。沢山の兵隊がアンペラ、毛布を敷いており、私もびっくりしました。私を迎えに来たのは兵長でした。みんなに話しておいてくれたのでしよう。真ん中の方に行き、みんな一緒に帰りましようとい拶を短くしました。みなさんの眼はまだまだもって忘れる事はありません。何百人おられたか分かりません。一個大隊ぐらいと思つきました。

真ん中の方に、みなさんが私の場所をつくつて置いて下さいました。毛布を着て雑魚寝です。

朝八時過ぎ、ロスケ少佐三人と通訳一人が来て、被服倉庫に入りたから立ち会つてくれと言います。小生知らぬと言つたと通訳が、立ち会うだけで

良い、鍵は持つて来ているからと。中に入つてびっくりしました。靴から毛布、被服、新しいのがぎっしり積んであります。ロスケ将校が言う、こんなに沢山あるのに日本はなぜ負けたかと話される。私は分からぬと言うと、将校笑つておりました。

三日ぐらい過ぎて、ロスケ兵一個小隊ぐらい来る。ロスケ軍曹が来て、三合里に行つてくれと話された。

八列縦隊で歩き出しました。私は人数は関係なく、みんな無事であれば良い。ロスケ兵が歩きながら数をかぞえるのですができない。軍曹が私の所に来て問いますから、数えてやった。三合里に無事着く。

小生は別の部屋に一人入れられ、兵隊と別れました。食事は分隊から持つて来てくれましたが、醤油ご飯でした。醤油がよくあったものだと思つておりました。腹が痛くなり医務室に行きました。帰りに見ますと中隊長の部屋の前を通り、中隊長

に大丈夫かと問われ、心配ありませんと申し、帰つて休む。翌日医務室に行き、帰り中隊長が待つておられ、話をされる。兵隊が私にお世話になったから醤油ご飯を炊いて持つて行つたと話され、ここは水が悪いからと申された。私は調子が悪かつたと思う、また有り難いと思うが、腹の痛み止らぬ。診断はアメーバ赤痢とされ、直ちに、九月十七日平壤陸軍病院に入院、十月十七日三合里出発、夕方鮮満国境通過、十月十八日間島省延吉県延吉陸軍病院に収容、十一月三十日退院する。

延吉収容所に収容、第二大隊第三中隊一班に入る。私は指揮班との連絡係で各分隊を調べると、兵隊以外に開拓団一個班、警察官、憲兵一個班十六人がおりました。夜半にロスケ兵に警察官、憲兵が連れて行かれました。また開拓団の方も日を替えて連れて行かれました。当時、収容所には八個大隊居たようでした。

一日の食事は高粱、米の粥が飯盒に五分の一。一日朝夕二回、四時には黒パン三〇〇グラム、配

給あるときもあり、食事は悪い。

午前中、弾薬貨車積み一週間にて終り。次は糧秣貨車積み一週間ぐらいで終る。午後、毎日薪取り。丸太一本。板一枚かついで帰るのが精いっぱい、体力がみんな落ちていく。

二十一年正月になって栄養失調にて亡くなっていく友が多くなってきました。毎日午前、午後一回薪取り仕事です。雪は約三十センチぐらいあり。途中、毎日のことですが、女の方が男の姿に、髪を切り顔には墨をぬり、蓋に餅を入れて売りに来られる。私達は八列縦隊ですから列の途中から入られて、なくなれば隊を家のある所にて、横に寄せて送り出す。これは毎日のように代わる代わる来られる。聞いてみますと、主人の帰りを待っていると云われ、なんとも返事の言葉がありません。また子供のある方は支那人の家に助けを求めて駆け込んだ方が沢山おられた。

時々行き帰りの雪の中、ロスケ兵が強姦するのを見ます。どうすることもできず、みんな下を見

て黙々と歩いている。

私が支那の第一線で戦い、部落占領したとき、逃げる女子供には銃を向けず、手まねで一カ所に集める。みんな安心している。ロスケ兵は違う。

あとでシベンコ大尉に聞いたのですが、ソ連第一線の兵士は囚人で正規軍はそんなことはしないと話されました。

一月末ごろには毎日亡くなっていく。ある朝、私が指揮班に行っておると呼びに来ました。早速帰ってみますと碁を打っていた年配の友人が亡くなっていました。元気でいたのに、ただ手を合わすしかありません。この朝三人亡くなり、戸口にロスケ兵が二人おり、来いと言われ、詰め所に連れて行かれた。別のロスケ兵が二人来て、私たち六人と裏の墓地に初めて行き、私たちはびっくりしました。墓地とは名ばかりにてここは地下一メートル以上凍っております。小山のように長く長く連なっており、見渡す限り何列もあります。ロスケが早くせよと言います。私が見ているので、

見てはならぬ早く穴を掘れと言う。六十センチくらい掘ると、良いと言う。上に水をかけて皆様の冥福を祈り、手を合わせて帰りました。

小山の死体、長く連なっており、見渡す限りです。何千何万あるのか想像もつきません。私たちがもいつ行くか分からないと笑って別れました。二月中旬ごろまで続き、死者も少なくなりました。三月には十一個大隊いたと、語り部の軍曹が話してくれました。

私達の前は糧秣倉庫でした。ある夜九時ごろ、腹が空いていたのでしよう、倉庫に入らんとして銃殺された人もおりました。このころの一日行事は午前午後の薪取り板一枚。丸太木一本担いで帰るのですが、体力が落ちており、情けない。

二十一年三月十五日延吉出発ダモイ
行軍途中、小川のある所にて夜営。皆さん、そこここにて野草を炊いており、私の隣の分隊の一人があえぎながら倒れました。野草を食べたのです。

二十一年三月二十日ソ満国境通過

二十一年三月二十四日ウオロシロフ奥地到着

山間部ラーゲルは出来ておりました。私達は一個大隊になっておりました。ロスケ兵の隊長はコシベンコ大尉でした。長い付き合いになりました。炊事場、医務室造り、ロスケ女医さんの身体検査とすることにてちよつと恥ずかしいが裸になって見て頂く。シラミのことに注意しておられた。伐採のノルマ一人五立方メートル、三人一組で十五立方メートル、二人用鋸を渡され、山に入りロスケ兵より説明ある。みんな初めてで、松、モミの木、元口一メートル前後の木で、私達は見た事もないような大きな木で、ノルマが出来るなと思つたが出来ない。三分の一ぐらいでした。二、三日の食事は飯盒三分の一ぐらいでしたが、三日目からノルマも少なく、班で二人は野草取り、食べられる物は何でも持って帰る。

あるとき、中隊長コシベンコ大尉が私の所に来られ、日曜日ごとに、一般ロシア人の家を造つて

くれと言われた。

初めは中隊長ジープにて大工二人と私、三人を連れて行ってくれ、丸太造りの話を聞き、簡単な図面を書いてあげた。一般のロシア人の方は好意的で親しみが増し、主人夫婦と娘さん二人でした。またここからは海が近いのでしょうか、日本人、ノモンハン捕虜が十四人ぐらいで漁師をして暮らしておられて二週間ぐらい前に異動されたそうです。この方達はみんな戦死として扱い永久に帰れないでしょう。

八月初めごろと思う、夕方五時ごろ帰り、支度しているとき少佐が来て、電柱にする十二メートルの木を班で一本ずつ切ってくれと頼まれる。ここは時間外は仕事するなと言うことでしたが、頼まれて皆んな仕方なく我が班は病気休みにて、七人しかおらぬ、倒して担ぐ事が出来るかと思ひ、私の思う所に倒して末口三人、元口四人、私が後から三人目にて担ぎ、道路まで五メートルしかないのに、末口三人担ぎ内一人肩から落す。みんな

落し、私がかんばったから腰を痛め立てない。少佐道端にて見ており、直ぐ来た。抱いて医務室に連れて行ってくれました。一週間ぐらい立てない。箸が持てない。幸に島根県温泉津の衛生兵がおられ、約三カ月休み、お蔭で仕事に出られるようになりました。

森林鉄道を敷設する仕事に替りました。

線路を敷いたり橋を造ったりするので、ノルマは一〇五パーセントから二〇〇パーセントぐらいになり、ハラショー、ラポターになり、またあるとき、中隊長が私を呼んで、ジープに乗って奥地に行く、見渡す限り原野でした。ロスケ将校五人が来ており、日本人は私一人でした。中隊長、目で誰にも言うなと合図されたと思う。この仕事を長くしております。

流行作曲家の吉田正さんが私の班に来ておりました。

二十三年六月三十日ウオロシロフ劇場修理のため、出発。

七月一日朝起きて点呼取らんとするも腹が痛く起きられぬ。ロスケ少佐が来る。どうしたと聞かれたので腹が痛むというと、上段で寝ていたの为上って来て、大きな声にて兵隊を呼び、私を抱き下して自分で背負ってラールゲルを出て材木を積んだ自動車を呼んで材木の上に毛布を敷いて寝かせて駅まで出て、丁度汽車が来ており、私を背負って汽車に乗るとロシア人みんな、ボルノニダ、と言いい、席を空けて私を寝かせてくれました。

アルチヨム駅へ着き、また病院に。また背負って連れて行ってくれました。

二十三年七月一日アルチヨム病院入院。ソ連軍医、日本人軍医に注射を打って頂き楽になる。日本人軍医が話すには、ソ連軍医が手術をしたがつているが絶対してはならぬ。慢性盲腸炎とのこと、起きることはならぬ。これで帰りなさい、と申され、分隊を残していると話すと、心配いらぬ早く帰りなさいと言われた。日本に帰るまで船の中も、寝て帰りなさい、起きてはならぬとのこと。

二十三年九月八日高砂丸にてナホトカ港出港
二十三年九月十二日舞鶴港上陸、私は抑留中、三回入院して皆様にお世話になりました。

母は、私が帰るまで元気であった。長男ゆえに、家を継ぐことになった。

水稲をやり、県職員の福島勇先生の指導にて、昭和三十六年より二十世紀梨を一ヘクター栽培した。家内が平成八（一九九六）年に亡くなったので、規模を小さくして健康のため働いています。

平成十年十月二十五日ウースン友の会を山口県で、山口大会をしました。私と同じ年代の仲居さんの話では自分は奉天から帰ったが、汽車の中にロスケ兵が乗り込んできて強姦したそうです。戦争は二度としてはならない。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正七年十二月二十三日生

現住所 島根県江津市嘉久志町

軍隊の略歴 昭和十四年十二月 徴兵検査で甲種

合格

昭和十五年八月 島根県浜田市歩兵
第二十一連隊二大隊入隊

昭和十五年十二月 中国大陸に渡り
各地の作戦に参加

昭和十八年七月 召集解除

昭和二十年八月 臨時召集、朝鮮羅
南第一七三師団挺進大隊入隊

昭和二十年九月 平壤陸軍病院に入
院

昭和二十年十一月 延吉陸軍病院を
退院

昭和二十一年三月 ウオロシロフ収
容所抑留

昭和二十三年七月 アルチョム収容
所抑留

昭和二十三年九月 高砂丸にて舞鶴
港上陸、復員

復員後の略歴並現在

昭和五十三年島根県連合会結成当時から江津市
支部長として会員七十八人の統轄、指導と会の運
営に尽力され、会員中最高齢ですのに元気で活躍
しておられます。

昭和二十三年九月復員後、水稲主体の農業に従
事。昭和三十六年からは一ヘクタールの果樹園
（梨・ぶどう他）を経営、この間市農業委員とし
て活躍、農水大臣並びに県知事より功績を認めら
れ表彰されました。

十三年前に奥様が他界されたため農園の規模を
縮小しました。

現在九十歳ですが最近聴力が低下して若干不自
由を感じるが、他には悪くなく長女夫婦と同居、
現役として働いておられます。

（島根県 本田 吉則）